

<実践報告>

協働的問題解決力育成のための実践の試み
—外国につながる子どもに対応する教員養成の授業から—

徳井厚子 信州大学教育学部言語教育講座

A Practice of Cooperative Problem Solving in a JSL Teacher
Training Class

TOKUI Atsuko: Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	外国につながる子どもに対応する教員養成の授業において試みた「協働的問題解決力育成のための実践」の報告およびふりかえりシートからの考察を行なう
キーワード	外国につながる子ども 教員養成・協働的問題解決力
実践の目的	協働的問題解決力育成のための実践
実践者名	第一著者と同じ
対象者	学部生 2・4年 11名
実践期間	2009年10月～2010年1月
実践研究の方法と経過	<p>「D.I.E. メソッドを用いたコミュニケーション摩擦の問題把握と解決を考える実践」ではD.I.E. メソッドを協働で行ないながら事例を事実、解釈、評価に分析した。</p> <p>「総合的な視点からの問題解決力を養うことを目的とした実践」では外国籍の子どもの事例を読み、子どもを中心に据えたマクロ、ミクロ双方のレベルの5つの要因に分け、ミクロ、マクロな視点も含めた総合的に問題解決法を行なう方法を考える。</p>
実践から得られた知見・提言	<p>学生のふりかえりからは、客観的な問題把握の必要性、多角的な視点による問題の顕在化、協働による多角的な視点からの解決の重要性、協働によるアイデアの創出、摩擦の要因への気づき、マクロ・ミクロな面から総合的に問題を解決していくことの必要性、視覚化して問題解決することの重要性が挙げられた。新たな創造的な問題解決方法としてのシナジー効果もあったと考えられる。</p>

1. はじめに

平成2年の出入国管理に関する法改正が行なわれた結果、日本では就労制限のない定住資格で日本に居住するブラジル人等が近年急激な増加をし、その結果、子どもの教育の課題が現在大きな問題をなりつつある。文部科学省では、平成21年12月に「定住外国人の子どもの教育等に関する政策懇談会（中川文部科学副大臣主宰）」を設置し、平成22年5月に政策のポイントの取りまとめを公開した。このとりまとめでは、外国人児童の日本語指導の充実を図り、外国人学校も含め制度面の検討を行なうと共に外国人児童の日本語指導に関わる教員の養成についても検討される必要があるとされている。

外国につながる子どもが急増している今日、このように政府は近年になり様々な検討を始めたところだが、大学における教員養成においても外国につながる子どもに対応する教員をどう養成していくかが大きな課題をなっている。

これまでいくつかの大学で実践が試みられているが、具体的な実践報告はまだほとんどなされていないのが現状である。地域により実状は異なるが、多様な現場における問題点や課題を把握するとともに今後様々な実践研究を積み上げていくことが課題であろう。

現場で抱えている問題の一つに、外国につながる子どもの対応を担当する教師が一人ですべて抱え込んでしまうことが挙げられる。特に外国につながる児童が分散している地域においては、学校全体において外国につながる生徒への関心や理解が薄かったり、一部の担当の教員のみが対応せざるを得ない状況になりその結果その教員が孤立してしまう可能性もある。こうした中で外国につながる子どもに対応する教員は、子どもを取り巻く環境を総合的に理解しつつ、学校内外の多様なメンバーや組織と協働で問題を解決していく力が求められる。教師のコミュニケーションはともすれば教師対生徒という1対1のミクロな対人レベルのコミュニケーションが重視されがちであるが、組織間、あるいは組織内におけるコミュニケーションというよりマクロなレベルのコミュニケーションも重要である。

また、教員養成の授業においては、外国につながる子どもに対応する授業としては、現場での実習を行なったり、外国につながる子どもに関するケースについて学ぶといった授業が考えられる。これらは実践能力を向上させたり外国につながる子どもに関する知識を得るという意味では重要な学びの一つであると考えられる。しかし、知識を得たり体験を積み重ねるだけではなく、得た知識や経験をもとにして、現場において問題を整理して把握し、問題解決を他者と協働で行なうことのできる力を養っていくことも、外国につながる子どものいるどんな現場においても対応できることにつながるのではないかと考える。

本報告では、こうした課題に応えるため教員養成課程の中で行なった「協働的問題解決力育成のための実践事例」を紹介する。これは、グループ活動での対話を通して他者と協働しながら問題（状況）を視覚的に共有、整理し、多角的な観点から問題解決を考えていくプロセスを重視した実践である。なお、本報告では、協働的問題解決力を「他者と協働していくプロセスで多角的な視点を共有しながら問題解決する能力」と定義する。本報告における能力とは、知識 ability ではなく実践的な能力 competency を指す。

なお、本報告で扱う外国につながる子どもとは外国籍の両親を持ち、外国籍である子どもばかりではなく、両親のうち一方が外国籍である子ども（日本国籍の子どもも含む）や中国帰国者の子どもも含んでいる。

2. 実践概要

2.1 授業の位置づけ

本実践を行なった授業科目名は「帰国・外国籍児童生徒教育論」であり、教育学部の高年次向けの（国際理解教育分野学生対象）科目である。授業は、帰国児童生徒、外国籍児童生徒の現状と課題を把握し、バイリンガリズム、異文化適応、教科の学習等について学ぶと共に協働的問題解決力を高める実践を行なった。本発表で報告する実践は、このうちの「D.I.E メソッドを用いたコミュニケーション摩擦の問題把握と解決を考える実践」および「総合的な視点からの問題解決力を養うことを目的とした実践」である。受講者数は11名である。

なお「外国につながる子どもについて扱う授業」は、1年次で行なう「多文化理解教育」の中でも一部扱っている。今回「協働的問題解決力のための実践」を高年次の授業において行なった理由は、異文化理解に関するある程度の知識を備え、地域における外国につながる子どもとの学習交流会の参加等ある程度の実体験を経ている受講者が多いため、それらの経験や知識を活かしつつ協働的問題解決力を身につけることができると考えたためである。

2.2 実践目的

外国籍児童生徒に対応する教員は、教科や日本語を教えるだけではなく、子どもをとりまく様々な状況を多角的な視点から把握し、ひとりで抱え込むことなく周囲と連携し、協力しながら協働で問題解決を行なっていく力が求められる。すべての問題を教員個人が抱えるのではなく、一人の教員で解決できる問題の限界を知り、ミクロな個人レベルだけではなくマクロな制度的なレベルも含めた上で問題を整理し、他者と協働で問題解決していく力を養うことを目的とする。

協働的問題解決力を高める実践の目的は以下の通りである。

- 1) 他者と協働しながら問題を共有することで多角的な視点から具体的な事例（注1）をもとに問題を把握し、整理し、問題解決を考えていく。
- 2) 集団で協働しながら問題の共有をし、創造的に問題解決を考えていくコミュニケーションのプロセスそのものを重視する。

2.3 実践概要および結果

協働的問題解決力育成のための実践として「D.I.E メソッドを用いたコミュニケーション摩擦の問題把握と解決を考える実践」（実践1）および「総合的な視点からの問題解決力を養うことを目的とした実践」（実践2）の2実践を行なった。

(1) 実践1：D.I.E メソッドを用いた摩擦の問題把握を協働で行なう実践

これは、D.I.E メソッドを協働で行ないながら事例を事実、解釈、評価に分析し解決する力を養うための実践である。D.I.E メソッドとは、異文化トレーニングの一種で、摩擦の事例を Description（知覚）／Interpretation（解釈）／Evaluation（評価）に分け整理しながら問題を把握し解決していく方法である（注2）。今回の実践ではD.I.E メソッドを協働で行なった。

この方法を実践で行なった理由は幾つかある。まず現場において様々な問題に直面したときに、教師はともすれば事実、解釈、評価を混同してしまいがちなのが挙げられる。まず、事実を把握してから解釈、評価を行なうことが重要である。また、教師は評価を重視する傾向にある。D.I.E メソッドを協働で行なうことにより、事例をより客観的に分析することが可能と考えた。

具体的な実践の方法は以下の通りである。

- ①外国につながる子どもに関する摩擦のケースを読む。
- ②摩擦の場面を登場人物それぞれについてグループで視覚的に共有しながら協働で事実、解釈、評価に分析する。
- ③分析をもとに協働で問題解決の方法を考える。

表1 D.I.E での分析事例

母親			教師		
事実 Description	解釈 Interpretation	評価 Evaluation	事実	解釈	評価
先生が来てもなかなか 家の中に入らない	日本人の控えめな表現 話したいことが話せない	残念	半日で20人の生徒 家の中に入らない	過密なスケジュール 不公平をなくす	問題ない

表1は、あるグループの行なった摩擦の分析事例である。一つの事実に対して解釈が多様であることがわかる。グループで共有することにより、分析の過程で多様な解釈の可能性の気づきを共有することができた。

(2) 実践2：総合的な視点からの問題解決力を養うことを目的とした実践

子どもを中心に捉えミクロ、マクロな側面から総合的に問題を捉え、解決する力を養うための実践である。以下の実践を行なった。

- ①外国籍の子どもの事例を読み、子どもを中心に据えたマクロ、ミクロ双方のレベルの5つの要因（個人の属性要因、個人的要因（語学力等）、家族要因、コミュニティ要因、教育システム要因）に分ける。

- ②ミクロ、マクロな視点も含めた総合的に問題解決法を行なう方法を協働で考える。

具体的には、表2のように縦軸に教科、言語、異文化交流、アイデンティティを、横軸に制度、コミュニティ、学校、家庭とし、それぞれの交叉した枠でどのように問題を解決す

ることができるかについて考えた。

尚、いずれもグループ活動で行ない協働で問題解決を行なうプロセスを重視している。また、いずれも視覚化することにより、プロセスそのものを目にみえやすく、共有しやすくするという方法をとっている。具体的には、ポストイットを用いて作業そのものの中で試行錯誤していくプロセスを視覚化するという方法を用いた。

以下は受講生による、マクロ、ミクロな側面を含めた総合的な問題解決を考えた事例である。例えば「コミュニティでの学習交流会」の提案等、実際に行なった活動の経験等も解決方法を考えていくために活用していることがわかる。

表2 ミクロ マクロな視点を含めた総合的な解決方法（事例）

	制度	コミュニティ	学校	家庭
教科	教科書の開発 サポーターの予算	コミュニティでの学習交流会	日本語教室／保護者との連携 ／JSL カリキュラム 進路指導の充実	家庭学習の内容を工夫
言語	多言語放送の充実 多言語の 電話相談 多言語パンフレット 日本語支援者の増加 行政の 窓口充実	日本語教室 親への日本語支援 情報の多言語化 コーディネーターのネットワー ク	学校の中での多言語環境づく り 母語別サポーター	家庭の中での言語環境づく り
異文化交流	交流会のための補助金	交流会 スポーツ大会	保護者と料理会 総合の時間 での授業	
アイデン ティティ	法律の改正	多国籍茶話会	学校目標にアイデンティティ の充実 多言語環境	母語の物語の読みきかせ

3. ふりかえりシートにみる気づき

ではこれらの授業からどのような学びが学生に見られたであろうか。以下は実践後に行なった自由記述式のふりかえりシートから、学生にどのような気づきがみられたかについて分析する

3.1 D.I.E を使った実践から

(1) 広い視野に立った事実の把握の必要性

○実際現場ではトラブルがおきた二人の言い分から推測することが多く、事実の把握は難しいものなのだろうなあ、と感じました。両者がなぜすれ違ってしまったか事前に防げたのではないかいいろいろ話してみんなで解決策を考えることができてよかったです。先生、学校自体、母親のそれぞれ配慮すべき点を見つけることができてよかった。グループで共有できてよかった。

(2) 客観的な問題把握の必要性

○まず一人で事実の確認をしましたが、その後グループになってさらに広い視野で事実を捉えることが非常に大切だと思った。自分一人では気がつかなかったこと、自分一人の解釈に陥ってしまったこと等が浮き彫りになってきてより客観的な視点から問題点

を見いだすことができた。さらに、相手の立場、言い分も同様に D.I.E の観点から捉え
ると自分の D.I.E と照らし合わせてどこですれ違いがおきたのか、詳しくみることがで
きた。より客観的に、より詳細に問題を見ることができる D.I.E メソッドはいろいろな
問題で活用されると思う。

(3) 多角的な視点による問題点の顕在化

○それぞれ違う立場から見ている出来事を客観的に見直すことは大切だと思った。あ
る一点から見るだけでは見えてこない部分がたくさんある。その見えていない部分が誤
解につながってくると思った。それぞれの立場で話してから事実などを共有することで
自分が見落としていた部分を再確認することができてよかった。

(4) 協働による多角的な観点からの解決の重要性

○多面的に考えることによっていろいろな解決策が出た。

○最初に一人で考えてからグループで共有する方法は、自分が気づけなかったところ
に目がいきやすいのでよいと思った。

○グループで D.I.E をすることで、自分ではわからなかった事実、解釈、評価を見つ
けることができた。また自分の考えが正しいのか確認することができた。一人で考えて
はどうしてもひとりよがりの方法になってしまうだろう。

(5) 協働で誤解のプロセスを考えることの重要性

○誤解を生じないようにすることも大切だが、生まれてしまった後でどこで誤解が生
まれたか、どうすれば誤解は生まれなかったのかを考えることも大切だと感じた。

○D.I.E をやって親と教師の事実と解釈の違いを確認しあってよかった。

○どうして摩擦が起きたのか、どうすればよかったのかということを考えていくこと
がおもしろかったです。文面だけでは感情や解釈がくわしくわからなかったのが当事者
たちの気持ちになって考えようと思いました。学校のシステムをこうすればいい、と考
えるのですが、実際には難しいと思います。摩擦が起きるのは教師と親なので両者の連絡
のやりとりを密にしたり互いに細かなことまで配慮すべきだと思いました。

(6) 協働によるアイデアの創出

○個人だけでは出てこなかった考えや視点がグループの中で出てきたのでその後の情
報共有で大変役にたった。

(7) 摩擦の要因への気づき

○D.I.E で整理してみると、お互いの考えのすれ違いが本当に多いなと感じた。「相手
もわかってくれないだろう」という思い込みはその後の関係の悪化にもつながっていく
大きな要因となりうるので気をつけなければならないと改めて思った。

(8) 摩擦の解明についての提案

○特に今回のようなケースでは片方の国に家庭訪問というそれがどういったものであ
るかの説明からしっかりとし、小さなことでも誤解を生まないための努力が必要だと思
った。

○今回のケースのような異文化摩擦を防ぐにはお互いの考えを伝え合うことが大切である。お互いがもっと歩み寄る姿勢が大切だと思う。

3.2 マクロ・ミクロな側面から子どもを中心にトータルに問題を解決する能力の育成をめざした授業

(1) 総合的な観点から解決していくことの気づき

○何か子どもに問題が起きたら先生が自分の問題として抱え込みすぎてしまうことが多いが、そうではなくきちんと整理し、問題点、解決法を導きだすことが重要であり、またその方が子どものためになると学んだ。日常生活の中できちんと問題を整理することを実践してみようと思う。

(2) 協働で試行錯誤していくことの重要性の気づき

○その子のことを第一に考えるなら、仲間とともに試行錯誤していくことが必要だと思った。

○一人で考えるだけではなく皆で考えることによって相乗効果でどんどん新しいアイデアが出てきておもしろかった。

(3) マクロな視点を総合的に整理していくことの重要性への気づき

○異文化体験をその子どもの視点に立ってとらえ、整理し、客観的に問題解決の糸口を見いだしていくことが大切だとわかった。またその属性や個人要因にばかり問題があると考えないようにすることは非常に大切であるし、無意識でしてしまうことだと思うので、しっかり認識しておきたい。

○外国籍の子の問題を考えるときに、家族やその子の言語力や性格ばかり考えがちだったが、それ以外にも多くの原因があることがわかった。今回みたいにその原因を整理してその分野でどんな解決策が考えられるか多くの人と考えられて自分では思いつかない案が出ることに驚いた。

○今まで個人要因レベルを中心に外国籍をとらえていなかったのですごく視野が広がりました。学校のしくみ、社会のしくみを変えることは大変なので現場の先生は限られた時間の中で日本の学校教育と外国籍の子の日本語指導に追われ、追いつめられてしまうのだと思いました。しかし、今日のように整理してみると要因は個人に偏っているのではなくむしろ家庭やコミュニティの方にあるのだと気づきました。解決への道筋も見えやすくなって気持ちも軽くなると思います。今後実践していきたいです。

(4) 多角的な視点からの解決の必要性

○事例をもとにして様々な要因を考えることができた。一つの要因を解決の方向にもっていくだけではなくて、個人、家族、教育など多方面から解決策を考えることの大切さを学んだ。中には制度のようなものは変えられないかな、無理かなと思ったものもありますが、今後、もしかしたら改善されることもあるかもしれないと思う。たくさん解決策を出してできるかどうか考える、万策つきるまで考える、というのはSちゃんによ

りよい生活につながるんだと思った。

(5) 要因同士の関連による問題解決への気づき

○家族とサポーターがもっと協力して宿題を出すなどコミュニティと家族間で取り組めるものももっとあると思う。それぞれの要因が独立して問題を抱えているような状態なのでこれも他と関わることによって相乗効果が生まれていくことが期待できる。

○対策を考える時も一つの要因での解決策を他の要因に結びつけて考えることにより具体的で複眼的な案ができたと思う。このように考えるときに政策や予算を仮のものにするのではなく、ある程度現実に即したデータを用いてより実践出来るようになりたい。

(6) 視覚化していくことの重要性への気づき

○視覚化していくと複雑な問題もわかりやすくなって良いと思いました。

○実際のケースで考えたが、視覚化することによって問題点が浮き彫りになり考えやすかった。

○様々な要因も具体的なケースをあてはめて整理してみると本当に多く細かい要因が出てきてまたそれが複雑に関係し合っていることがわかりました。けれどやはり視覚化してみると整理ができてこの後どう対応していけばよいのかわかりやすくなるなど感じました。その子が生きる力をつけていくためにはどう対応するのがよいか同時に考えていけるようになりたいと思いました。

○頭の中を整理することって大切だなと改めて感じた。書くことで見えなかったものが見えてきて本当にわかりやすい。外国籍の子どもだけではなく日本の子どももあてはまると感じた。現場に出たら、しよいこんでしまうと思う。いろいろなレベルから考えることは本当に大切でいいことだなと思います。視覚化することで子どもに対してできることが見えてきました。子どもをとりまく要因って本当に複雑なのだなあと感じました。

3.3 最終レポートから

授業後の最終レポートからどのような気づきがみられたであろうか。

(1) コミュニケーションの重要性

○授業全体を通して話し合うことの重要性である。話し合うことによって自分では考えつかなかったようなアイデアが聞けたり、自分の言ったことをさらに工夫してもらえたり他者とのコミュニケーションの相互作用によってよりよいものが得られた。このように話し合うことは現場に入ってからでもきつと必要になるだろう。一人で考えるよりも皆で相談した方がよりよくなるということが身を以て学べた。

(2) 外国につながる子どもとの実際の交流実践の場面との関連から

○外国籍児童の実態の把握の方法である。授業で子どもを取り巻く環境には個人要因だけではなく家庭や学校等の社会的な要因も存在することを学んだ。前回の学習交流会で、

子どもをサポートしたとき、母親と話すことの大切さを知った。もしその子どもとだけ 1 対 1 で関わっていたら性格だけで判断して「人懐っこい子だな」という印象で終わってしまっただろうが、母親と話せたおかげで「深い愛情に触れて育ってきたからこそ優しくて人に対して抵抗を感じずに接することができるんだろうな」など、学習交流会だけでは見られないその子のいろいろな面を見ることができた。子どもの言動には必ず家庭や友人関係等が影響している。子どもを広い目で見て様々な角度から捉えることが本当の子ども理解へとつながることを改めて学んだ。

○外国籍児童生徒担当の先生は子どもにとっても先生同士にとってもその親にとっても架け橋であると思う。子ども同士が自然な関わりを持てるように先生同士が共通に外国籍児童生徒を受け入れるように親御さんとの相談をするように架け橋となる存在なのだ。

4. 考察

ここでは、実践後の学生のふりかえりシートの結果を考察する。協働による問題解決を行なう実践を通して学生たちはどのような学びがふりかえりシートから見られるだろうか。

問題把握に関しては「広い視野に立った事実の把握の必要性」「客観的な問題把握の必要性」「多角的な視点による問題点の顕在化」「協働で誤解のプロセスを考えることの重要性」等が挙げられた。

問題把握を個人ではなく、協働で行なうことにより、より広い視野から客観的、多角的に問題を把握していくことができた与学生自身が捉えていることがわかる。何か問題が起きた時、その問題を個人レベルで捉えようとすると問題そのものを十分に把握しないまま一人で解決しようとしたり、問題そのものの把握の仕方も主観的、断片的にしか捉えられない場合が多いだろう。まず問題そのものを協働で多角的、客観的に捉えていく力が必要であるが、この実践からはこの力を養うことができたといえる。また「協働で誤解のプロセスを考えることの重要性」についての気づきも見られた。誤解が起きた場合、どうしても誤解をどう解決するかということのみに集中してしまいがちであるが、誤解の原因やそのプロセスを考えていくことは重要である。そのプロセスそのものを他者と協働で考えていくことは現場で様々な誤解に直面した際に必要であろう。当実践でもこの重要性への気づきがみられたといえる。

問題解決に関しては「協働による多角的な観点からの解決の重要性」「協働によるアイデアの創出」「総合的な観点から解決していく必要性」「協働で試行錯誤していく重要性」「マクロな視点を総合的に整理していく重要性」「多角的な視点からの解決の必要性」「要因同士の関連による問題解決の重要性」「視覚化による問題点の顕在化、単純化」等が挙げられた。

問題解決を行なう時「この方法こそ最善だ」と誰もが思う方法で行なう場合が多いと思うが、その方法自体を多角的に検討しながら、相対化し、その中でベストの方法を見いだしていくことは重要なプロセスであろう。また、自分自身の身近な立場に立って問題解決

を行なおうとしがちであるが、マクロ、ミクロ双方の視点を含んだ総合的な見地から問題解決をしていくことは重要である。さらに、一見無関係な要因同士と思われるもの（例えば家庭レベル、地域レベル、制度レベルでの要因等）も総合的な解決策を考えていく過程で関連があり、それぞれの関連性を考えていくことで問題解決に結びつくという視点も重要である。また協働で問題解決を行なう際、視覚化していくこともプロセスの共有という点で重要である。これらはいずれも実際の問題解決に必要な力であるが、協働で問題解決をしていく実践を通じて身につけることのできた力といえるだろう。

また、最終レポートにもあるように、今回の実践を単なる事例をもとにした実践として捉えるのではなく、具体的に外国につながる子どもとの交流の体験を通して、その体験をふりかえりつつ今回の実践に活かした学びとしているケースが見られた。このように自らの実践を授業を通してふりかえり、学びを深めていくことは重要だろう。また「他者とのコミュニケーションの相互作用によってよりよいものが得られた」「一人で考えるよりも皆で相談した方がよりよくなるということが身を以て学べた」という記述もみられたが、これも重要な指摘である。集団で協働的に問題解決することにより、新たな創造的な考えを生み出していくシナジー効果があったといえよう。

以上、本稿では協働的問題解決力育成のための実践の試みについて報告した。協働的問題解決力育成のための実践は、今回試みた実践事例ばかりではなく、他にも多くの実践が可能であると考えられる。外国につながる子どもに対応する教員養成では、今回提示した協働的問題解決力だけではなく、それ以外の力の育成も必要であると考えられるが、これらについても検討を続けていきたい。

注

1 当授業で挙げた事例は、家庭訪問の際に「担任の先生とじっくり話がしたい」と考えていた外国人の親と、訪問を「玄関で挨拶程度する」と考えていた担任の先生の摩擦の事例を取り上げた。

2 八代他 1998 p.230 参照。

文献

Adler, N., 1997 *International dimensions of Organizational Behavior*. International Thomson Publishing.

市瀬智紀, 岡田安代, 河野俊之, 齋藤ひろみ, 徳井厚子, 浜田麻里, 2008 多言語多文化化する学校と教員養成の課題 異文化間教育学会大会共同発表(京都外国語大学)

八代京子, 町恵理子, 小池浩子, 磯貝友子, 1998, 異文化トレーニング, 三修社

(2010年6月22日 受付)